

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32693

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02116

研究課題名（和文）医療現場における悲嘆の共同化の可能性と課題に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological Study on the Possibilities and Challenges of Grief  
Communalization in the Medical Field

研究代表者

鷹田 佳典（Takata, Yoshinori）

日本赤十字看護大学・さいたま看護学部・准教授

研究者番号：30634266

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、医療現場における悲嘆の共同化の可能性と課題について、社会学的な視点から検討することを目的に、ある小児病院で行われているM&Mカンファレンスでの調査を実施した。その結果、M&Mカンファレンスは参加者が患者の死について共同で振り返りを行い、その意味づけを行う場として機能していることが明らかになった。悲嘆の個人化が進む医療現場において、医療者が患児の死を共に悼むことの可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療現場における悲嘆についての研究は、患者家族（遺族）を対象にしたものがほとんどであったが、医療者の悲嘆をテーマとする本研究は、専門職者の悲嘆について新たな知見を提起するものである。具体的には、医療者が悲嘆を経験しているにもかかわらず、悲しむ権利が十分に認められていないこと、複雑な感情規則のなかで繊細な感情管理が求められていること、M&Mカンファレンスが共同の意味構築の場であることを明らかにした。社会全体で悲嘆の個人化が進む現代社会にあって、故人の死を共に悼む課題と可能性についての知見を提起した本研究は、今後のグリーフケアのあり方を考えるうえで社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted at an M&M conference at a children's hospital with the aim of examining the possibilities and challenges of grief collaboration in a medical setting from a sociological perspective. The results revealed that M&M conferences functioned as a venue for participants to jointly reflect on and make meaning of the death of a patient. In a medical setting where grieving is increasingly individualized, the study suggested the potential for medical professionals to mourn the death of an affected child together.

研究分野：医療社会学

キーワード：患者の死 悲嘆 悲嘆の個人化 悲嘆の共同性 医療従事者

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

イギリスの社会学者 J・ゴラーが述べるように、身近な人の死と向き合うためには、その死を共に悼んでくれる他者が不可欠である (Gorer 1965 = 1986)。だが、個人化が進む現代社会において、近親者の死は個々の死別体験者が独力で対処しなければならない課題となっている。そして、こうした「悲嘆の個人化 (individualization of grief)」が最も顕著な形で進行しているのが医療現場である (鷹田 2013)。

現在、約 8 割の人が病院で亡くなっているが、患者の死は、その家族だけでなく、医療者にとっても喪失感や悲しみ (悲嘆) をもたらす出来事である。しかし、医療者が他の医療者や遺族と患者の死を「共に悼む」機会はほとんどないのが現状である。その理由としては、第一に、病院が「看取りの場」でもあるという認識が希薄であることが挙げられる。病院はあくまで「治療の場」であって、患者の看取りや遺族の悲嘆については、実践的にも学術的にも十分に検討されてこなかった。

第二に、医療者が「悲しむ主体」として認識されていないことが挙げられる (鷹田 2012)。医療者は日常的に人の死と向き合わなくてはならない仕事であるが、「専門職である医療者は患者の死に慣れていない」といった誤った認識や、「医療者は常に冷静でなければならない」といった職業規範により、医療者は「悲しまない存在」、あるいは「悲しんではならない存在」とされている。その結果医療者は、K・ドカという「公認されない悲嘆 (disenfranchised grief)」を抱えながら (Doka 2002)、ごく少数の信頼できる人との間でのみ悲しみを共有するか、一人で孤独に喪失と向き合わざるをえない状況に置かれている。このように、医療現場においては、患者の死をめぐる医療者同士、あるいは医療者と遺族の「分断」が進み、私的に患者の死を悼むという「悲嘆の個人化」が顕著に進行していると言える。

### 2. 研究の目的

本研究は、このように「悲嘆の個人化」が進む医療現場において、医療者同士、あるいは医療者と遺族が患者の死を「共に悼む」ための可能性を探ることを目的としている。こうした研究を通じて、死別体験者間の分断が顕著な医療現場における「悲嘆の共同化」の可能性と課題を検討することを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究は上記目的を達成するために、(1)文献検討、(2)M&M カンファレンスでの質的調査を行った。

#### (1) 文献検討

医療現場における「悲嘆の共同化」というテーマに関連する領域は多岐にわたる。本研究では死生学や社会学、医学・看護学教育の文献を中心に、国内外の関連文献の収集、ならびに検討を行った。

#### (2) M&M カンファレンスでの質的調査

本研究では当初、医療者参加型遺族会調査と デスカンファレンス調査の二つを予定していたが、コロナ禍の影響もあり、なかなかフィールド先を見つけれないでいたが、M&M カンファレンスフィールドを実施している A 病院小児科に調査協力をいただけることになり、参加者のインタビューを中心とした質的調査を実施した。得られたデータは、質的記述的手法を用いて分析を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 文献検討

本研究テーマに関連するトピックとして、A) 悲嘆の個人化に関する社会学的研究、B) 医療者の悲嘆、苦悩 (suffering) に関する研究、C) 医療者の物語 / 語り (narrative) に関する研究を中心に文献検討を行った。

まず、A) 悲嘆の個人化に関する社会学的研究については、「個人化 (individualization)」が現代社会全体において進行している潮流であること、そこには肯定的影響と否定的影響の二側面があることを、ベックやバウマンの議論を参照しつつ確認した。それを踏まえて、死別と悲嘆に関するイギリス社会学の研究成果 (シール、ウォルター、ケレハー) を中心に、悲嘆についても個人化が進んでいることを指摘した。こうした悲嘆の個人化がもたらす影響、特に否定的な影響への対応の具体例として、グリーフケア (grief care) や寄り添い方の支援、コンパッション

都市といった取り組みに着目し、それらが「悲嘆の共同化」に寄与する可能性について検討を行った（鷹田 2020a）。

B) 医療者の悲嘆、苦悩 (suffering) に関する研究については、子どもの死をめぐる社会学的研究（鷹田 2020b）や、小児終末期医療に関する研究（鷹田 2019）に加え、特にコロナ禍で顕在化した医療者の「道徳的苦痛 (moral distress)」に関する研究についての検討を集中的に実施した。「道徳的苦痛」とは、自分のなかに深く保持された道徳的信念や期待に反する行為を持続的に行ったり、それを防げなかったり、目撃したりすることを意味する概念で（Litz et al. 2009: 700）もともとは退役軍人研究のなかで使われていたものが、医療者にも適用されるようになった。医療者の苦悩については、共感疲労やバーンアウトなど、従来「メンタルヘルス」上の問題として論じられることが多かったが、コロナ禍で明らかになったのはもう少し深いレベルでの苦悩、すなわち道徳的苦痛を含むような実存的苦悩を経験していることが明らかにされた。こうした研究の知見は、「死生の際」で働く医療者の経験をとらえる上で有用であると考えられる。また、医療者はこれまでこうした問題に対し、独力で、かつ効率的に対処することを求められてきたが、医療者支援の必要性が指摘されていることも、文献から確認された。

C) 医療者の物語 / 語り (narrative) に関する研究については、特に医療人類学と医療社会学の領域で展開された「病いの語り」研究を中心に検討を行った。従来は、患者の病いの語りに着目することが多く、医療者の語りについては十分な関心が向けられてこなかった。そこで、アーサー・クラインマンとアーサー・フランクの議論に依拠しつつ、「なぜ医師の物語は重要であるのか」について検討した。そこから、病いの語りをめぐる医師と患者の関係は、前者が後者の語りを聴くという固定的かつ一方向的なものでなく、語ることと聴くことが折り重なる相互的なものであること、病いの語りをめぐる関係性は、医師と患者の二者関係に限定されるものではなく、外部へと開かれていること、病いの語りにふれることで、医療者自身も患者も、両者の関係が、一方的に「ケアし、ケアされる」という関係ではないことを知ることになることの三点を指摘した（鷹田 2019）。

## (2) M&M カンファレンスでの質的調査

MMC は、重大な合併症 (morbidity) や死亡 (mortality) に至ったケースについて医療チームで振り返りを行い、医療実践の改善とそれによる患者安全やケアの質の向上を目指す検討会のことを指す。MMC は参加者の悲嘆の受け止めを目的としたものではないが、亡くなった患者の死を複数の医療者で振り返る MMC は、悲嘆の共同化についてもなんらかの寄与をしているのではないかと考えられた。本研究では A 病院小児科で行われている MMC の参加者を対象に、主にインタビューに基づく質的調査を実施し、得られたデータを質的記述的手法を用いて分析した。その結果、MMC が、教育の場、対話の場、悲しむ営みの場、として機能している可能性が示唆された。

まず については、MMC は参加者にとって、患者や患者家族への対応方法について学ぶ場であることはもちろん、司会などを通じてさまざまな意見をまとめる力や、意見交換を活性化する力を身につける場にもなっていることが明らかになった。続いて については、A 病院の MMC では、報告者のプレゼンを受けて、他の参加者からよりよい対応方法が提案されることもあるが、それが報告者のやり方を非難したり、失敗例として位置付けたりすることにならないよう注意がなされていること、司会者は発言が特定の職種や職位に偏らないように、なるべく多様な参加者に発言を求めていることなど、「犯人探し」や「個人攻撃」にならないような工夫がなされていることが明らかになった。また、倫理的なジレンマや葛藤をもたらすようなケースが取り上げられることもあるが、それらについても性急に結論を出すのではなく、複数の可能性を吟味しつつ、そのケースの理解を深めることに重きが置かれていた (Moral case deliberation と共通する部分があると考えられる)。こうしたやり取りを通じて参加者は、新たな知識や多角的な視点を獲得するとともに、スタッフ間の相互理解と連携も深まっていた。このように MMC が対話的な場として機能している背景には、医師が「同じ高さで話をしよう」とする病院全体の「文化」「土壌」があることが示唆された。

最後に については、データの分析から、MMC での振り返りには患児が入院してから亡くなるまでの一連の経過を振り返ること、時間を置いて振り返ること、多職種を含めた複数のスタッフで振り返ることの三つの特徴があることが分かった。また、「次にかす」という MMC の基本理念が、参加者の悲しむ営みと深く関わっていた。これらのことを踏まえ、MMC での振り返りは、参加者が共同で患者の人生や死の意味を再構築していくプロセスとして読み解くことができると考えた（鷹田 2023）。

文献検討と MMC での質的調査の結果から、患者が亡くなることで、その家族だけでなく、医療者も、ときに深い悲嘆経験を抱えていること、しかし、そうした悲嘆経験はなかなか認められず個人で対処すべきものになっていること、しかし、MMC のように、医療者の悲嘆の対処を直接の目的としたものではないが、共同の振り返りを通じて悲しむ営みの場として機能している仕組みが存在し、医療現場における「悲嘆の共同化」の可能性が確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鷹田佳典	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 書評：木下康仁著『M-GTA 実践の理論化をめざす質的研究方法論』（医学書院、2020年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 108-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹田佳典	4. 巻 52
2. 論文標題 子どもの死の社会学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児内科	6. 最初と最後の頁 1528-1530
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹田佳典	4. 巻 31
2. 論文標題 （書評）石田絵美子著『「進化」する身体 筋ジストロフィー病棟における 語りの現象学』（ナカニシヤ出版、2019年）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 109-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹田佳典	4. 巻 49
2. 論文標題 誰が医療者を癒すのか コロナ禍で浮き彫りになった医療者のsufferingに着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 131-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹田佳典	4. 巻 11
2. 論文標題 なぜ医師の物語は重要であるのか - 二人の「アーサー」からの示唆	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24525/shitsuforum.11.0_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹田佳典	4. 巻 32
2. 論文標題 死生の際で働くということ - 小児終末期医療の現場から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹田佳典	4. 巻 2020
2. 論文標題 現代社会における悲嘆の個人化 「悲嘆の共同化」に向けての一試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代宗教	6. 最初と最後の頁 83-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 鷹田佳典
2. 発表標題 「コミュニティ」と「ケア」はいかに接合されるのか？ コミュニティ【で / と / を】ケアする」
3. 学会等名 第48回日本保健医療社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鷹田佳典
2. 発表標題 対話の場としてのM&Mカンファレンス
3. 学会等名 第36回日本保健医療行動科学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鷹田佳典
2. 発表標題 患者の死を共に悼むための場としてのM&Mカンファレンス
3. 学会等名 第5回日本グリーフ&ピリブメント学会学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鷹田佳典
2. 発表標題 Educational functions of M & M conferences for nurses
3. 学会等名 Eafons 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鷹田佳典
2. 発表標題 子ども、病い、ナラティブ - 「生きられる物語」という視点から
3. 学会等名 第15回HPS国際シンポジウム・研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鷹田佳典
2. 発表標題 moralを取り戻すこと - 病いの語り研究の蓄積から考える
3. 学会等名 第34回日本サイコオンコロジー学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鷹田佳典
2. 発表標題 なぜ医師の物語は重要であるのか
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 鷹田佳典	4. 発行年 2022年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 情緒発達の精神看護の基本	

1. 著者名 鷹田佳典	4. 発行年 2020年
2. 出版社 生活書院	5. 総ページ数 217
3. 書名 支援と物語の社会学 - 非行からの離脱、精神疾患、小児科医、高次脳機能障害、自死遺族の体験の語りめぐって	

1. 著者名 鷹田佳典	4. 発行年 2024年
2. 出版社 紅葉書房	5. 総ページ数 132
3. 書名 支える側・支えられる側の社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------